特集

シリーズ

日本を蝕む学力崩壊

反知性主義を克服せよ

日本の未来を担う若者の「学力低下」が、深く進行している。文部省が唱える「ゆとり教育」を履き違え、「知」を軽視する風潮が蔓延。少子化で受験圧力が減った結果、高校生は世界で最も勉強しなくなった。小学校の算数ができない大学生。試験問題の意味さえ理解できない受験生。彼らはまもなく企業社会に入ってくる。　**（橋本 宗明、三橋 英之、三河 正久）**

大手機械メーカーの技能研修所で

指導員：「この材料の機械加工に適していると思うドリルを選んでみな」

工業高校出身の新入社員：「すいません。ドリルってどれですか」

指導員：「えっ知らないの…」

大学や高校などの教育機関から社会に輩出される若者の「学力低下」が、日本の産業界を蝕もうとしている。

ある大手機械メーカーでは、技能者のエリート教育を行うため、古くから若手技能者に技能研修所での研修を行ってきた。だがここ数年、工業高校や工業高等専門学校（高専）などを出て就職してくる技能系の新人の教育レベルが低いため、研修所の役割は新入社員を入社後1年間預かり、学校教育をやり直すというものに変わってきた。

「座学が中心で、実際にモノをいじってこないから全く身に付いていない。『聞いたことはあるけれど思い出せない』『実物を見て初めて学校で何を習っていたのか分かった』という声も聞く。学校教育の中で実体験をさせていないことにそもそもの問題がある」と研修所長は指摘する。

実は工業高校などで実習がないがしろにされた結果、「はんだごての使い方も知らない」といった問題は、かねて言われてきた。だが、「最近は工具の名前さえ知らない者がいる」（研修所長）というから、技能者としての質の低下は着実に進行している。

この技能研修所には、このところ年約40人の技能系の新入社員が研修を受けに来ている。高校の普通科出身者も1、2人いるが、大半は工業高校や高専の卒業者。だが、「工業高校出といっても、普通科出身とレベルは全く同じ。3年間高校で何を教わってきたのか。これでは、日本のモノづくりは復権できない」と研修所長は憤る。

しかもこうした若手社員のレベルダウンを指摘する声は、技能職に限らず技術職に対しても出ている。

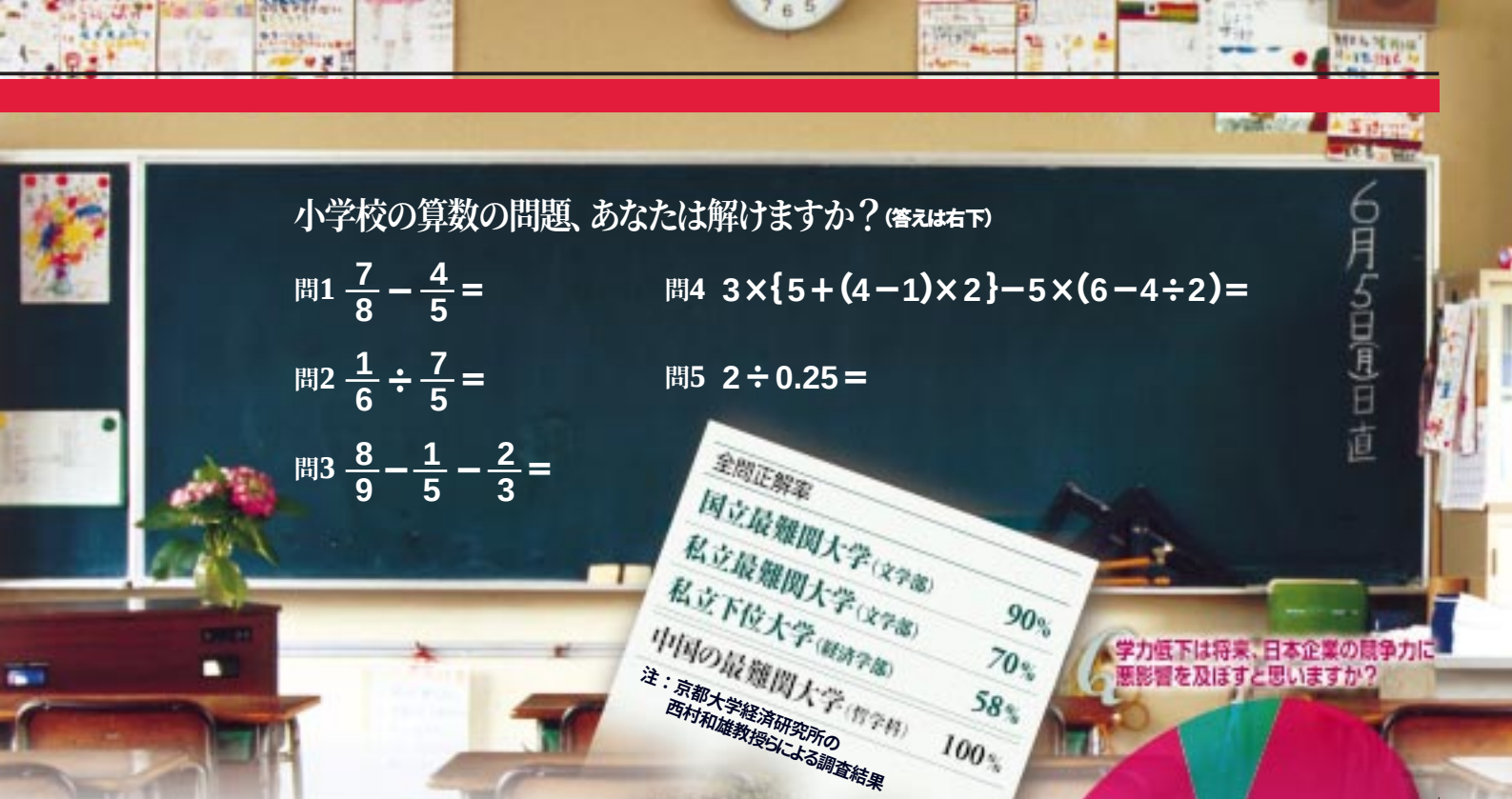
大手化学メーカーの研究所で

研究所長：「この前話した新しいテーマはどうかね。やってみないか」

大学院出の若手研究者：「学界の権威に聞くと、難しいだろうという意見です。やっても無理ですよ」

授業風景は今も昔も変わらない（筑波大学附属高校で。本文とは関係ありません）

（写真上：アルピナ、下：柚木 裕司）



小学校レベルの計算もできない大学生

出所：本誌ビジネス世論（調査方法は22ページ参照）

ある化学メーカーの幹部は、最近の若い技術者にはこんな風潮があると嘆く。「問題を与えれば解くことはできるが、自ら考えて問題を作り出す能力がない。誰もが否定するような研究にねばり強く取り組んでこそ革新的な製品が生まれるのに、権威者に否定されるとすぐあきらめてしまう。無理矢理やらせてみても、1年かけて『いかにできないか』という報告を作るのが関の山。大学院でも教授に言われたことしかやってこなかったことの表れだ」。

数字だけを見れば大学院への進学者は年々増加しており、技術者として企業に入社する新入社員の教育レベルは以前より高まっているはずだ。だが、現実にはそれさえも疑ってかかる必要があるようだ。

オリンパス光学工業・人事部の百武鉄雄課長は今春、技術者の採用のために全国の大学を訪問した際、複数の大学教授からこんな話をされた。

「今の院卒は昔の学卒程度の学力しか持っていないと考えた方がいい。就職に有利だからとみんな修士を取りたがるけど、昔の学生が4年でやっていたことを6年かけてやるようになったに過ぎないんだよ」

さらに深刻なのは、日本で最難関と言われる国立、私立のトップ校の大学生の「学力」までもが著しく低下していることだ。

上の黒板にある5つの計算問題は、いずれも小学校で学ぶレベルのもの。ところが学生の学力低下を危惧した国公立・私立大学の教授らが、これらを含めた問題を使って大学生の数学力を調査したところ、最難関の誉れ高い大学の中にも満足に解けない学生が少なからずいることが判明した。あるいは、ある私立トップ校文科系学部では、49の平方根を7と答えられない学生が3割近くに上った。

私立大学経済学部の授業で

教授：「この図のように需要と供給が交点Eで均衡している財に売り手負担で物品税を課すとします。課税後の供給曲線は課税額分上方にシフトし…」

学生A：「交点Eって何だよ?」

学生B：「均衡しているって、どういう意味なんだ?」

ミクロ経済学の基本中の基本、需要供給曲線。だが、経済学部の門を叩いた新入生の多くは、黒板に次々と引かれていく曲線や直線に戸惑い、ざわめきが広がるという。

（写真上：世界文化フォト、下：PANA通信、CG構成：但野 理香）

問題の答え：問1＝3/40、問2＝5/42、問3＝1/45、問4＝13、問5＝8

早稲田大学で応用ミクロ経済学を教える清野一治教授が解説する。「まず、グラフの見方を知らない。需要曲線や供給曲線の『傾き』や『シフト』が何を意味するのか分からない。グラフの交点が連立方程式の解を意味することもきちんと理解できていない」。

前述の数学力調査を実施した1人である西村和雄・京都大学教授は、1980年ごろ『ミクロ経済学入門』（岩波書店）という本を執筆した。この本は、それまで微分を使うのが当然だった経済学書にあって、連立方程式レベルの数学力で理解できる分かりやすさが特徴だったため、多くの大学で入門用の教科書として使われた。

だが、80年代終わりになると、この教科書でさえ「今の学生には難しすぎる」という声が届くようになった。それを聞き、「何かとんでもないことが起こっている」と感じたことが、他大学の教授と協力して学力調査を行うことになった発端だ。その西村教授は真顔で言う。「大学生の数学の学力は恐ろしいほど低下している」。

私立大学の数学の小テストから

問：「このクラスの生徒はすべてペンを持っている」の否定文を書きなさい

学生Aの解答：「このクラスのすべての生徒はペンを持っていない」

学生Bの解答：「ペンを忘れた生徒がいるかもしれない」

「大学生が小学生レベルの小数や分数計算を間違えるなんていうのはもう慣れた。それより深刻なのは、論理的に考える訓練がまるでできていないこと」。昨年まで関東のある私立大学で文科系学生に基礎的な数学を教えていた東京理科大学の芳沢光雄・理学部教授はこう言い切る。

芳沢教授は前の大学で学生に課した小テストの解答用紙の束を前に置いて続ける。「見てください。これが大学生の実態です。『このクラスのある（少なくとも1人の）生徒はペンを持っていない』という正解にたどり着いたのは、約100人の学生のうちただの1人もいなかった」。

こうした命題の否定文作りは、証明問題を解くのに欠かせない。その素養がすっぽりと抜け落ちている事実は、物事を筋道立てて説明する能力の欠如を意味する。「このままでは、論理的思考の固まりであるコンピューターのプログラミングやシステム分野では間違いなく海外に水をあけられる」と芳沢教授は懸念する。

大手予備校で

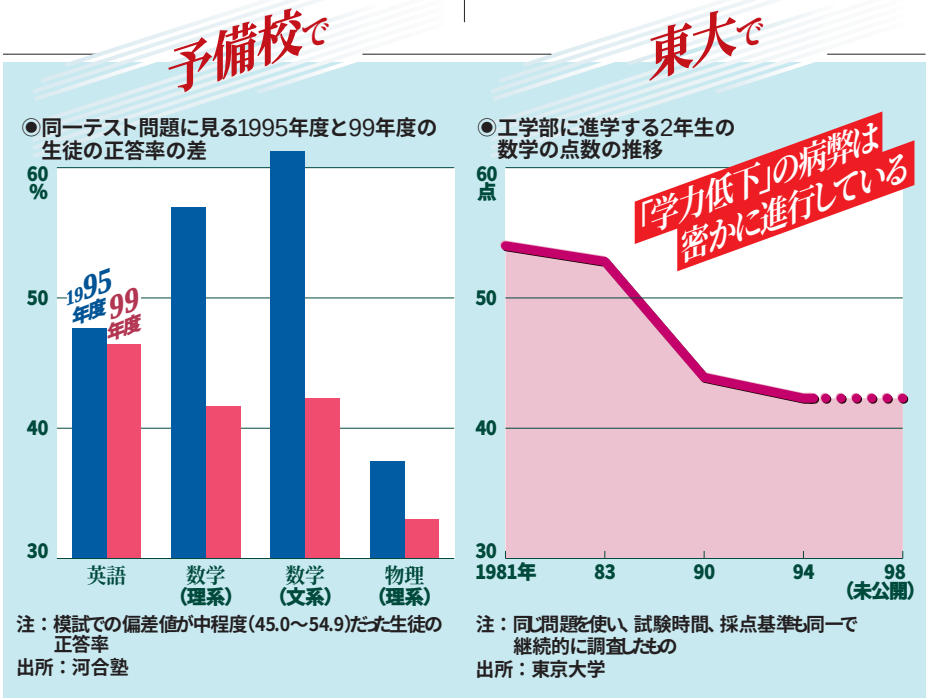
講師：「では問題を解きなさい」

生徒：「先生、問題文に『具体的な例を挙げよ』とありますが、『具体』ってどういう意味ですか？」

河合塾（本部・名古屋市）の横浜校での現代文の講義中のやりとりだ。質問された講師は、「問題に取りかかる前に、問題の意味を理解できない生徒は非常に増えている」と困惑する。大学の教官たち以上に若者の基礎学力の低下に敏感に気付き、悩まされているのは予備校の講師たちだ。

「全国統一の模擬試験などで毎年同じ問題を出題し、受験生の学力を定点的に検証しているが、その結果では特に偏差値が低い者の学力低下が顕著。恐ろしいのは、日本語の基本的な理解ができていない生徒が増えていることだ」。河合塾の丹羽健夫理事・進学教育本部長は危機感を口にする。

同塾ではこのところ、「日本語の能力が落ちたせいで、英語を教えられない」と口にする講師が増えている。例えば、英文和訳の問題では、文法も分かるし単語も分かる。そこで日本語に訳させると一応文章になってはいる。しかし、「その文章の意味をもとに先生が何かをコメントすると、どうも伝



学力低下についてあなたのご意見をお聞かせください

出所：本誌ビジネス世論のアンケートから

◆言葉遊びなどのセンスには長けているかもしれないが、**まともな日本語が話せない**（男性、46歳）

◆高校生、特に進学校の生徒ではない高校生は字を知らない。どう考えても小中学校で習う**簡単な漢字でさえ書けない**（男性、30歳）

◆ここ数年の新人は、専門的な知識はあっても、意外に簡単な基礎的知識がなかったり、日本語のリポートの**文章が支離滅裂**だったりすることが多い（男性、40歳）

◆**自分で考えることができない**。皆と同じことをしていれば何とかなると認識しているようだ（男性、44歳）

◆大学で教育に携わっているが、**好奇心やこだわりの欠如**を危惧している。好奇心やこだわりさえあれば自然と学習する意欲は出ると思うのだが（男性、36歳）

◆ひと昔前の小学生レベルという感じ。学力もそうだが、あまりの**モラルの無さ**には閉口する（男性、36歳）

◆**論理的思考力が低下**している。考えることに集中しない、頭を使う労力を避ける、という傾向が強くなった（男性、42歳）

◆**応用力がない**。マニュアルがないと仕事にならない。工夫できない。○×だけでくぐり抜けてきたのかと思う（女性、38歳）

◆**大学合格が目的**となり、高校で受験テクニックを覚えて大学で遊ぶ。付属の高校、中学に入った者は、遊び始める年齢がどんどん下がっている（男性、39歳）

◆学力低下もさることながら、**コミュニケーション能力**を高めてもらいたい。自分の意見を伝える、そして他人の意見を正しく把握し、1つの結論を導くなどの力が足りない（男性、35歳）

◆自分自身も含めて学力低下を感じている。私の場合、今思うと何も**目的意識を持たない**まま学生時代を終えた気がする（女性、29歳）

◆授業を受けていても、同じ**大学生として情けなく感じる**。未来の日本を背負う僕ら学生は、もっと学ぶことに熱心にならなければ。来る21世紀は僕自身不安になってしまう（男性、20歳）

若者は日本の未来を救えるか（筑波大学附属高校で。本文とは関係ありません）

わってない様子。生徒に聞くと、『訳してみたけど、どういう意味かよく分からない』と苦笑いする」（丹羽理事）。

大手予備校で

生徒：「洋服の『洋』って、なぜ洋の字を使うの？」

講師：「…」

河合塾のある国語講師は、高校3年生の女子生徒からこんな質問をされて面食らった。一瞬、質問の意図をつかみかねたほどだ。それでも気を取り直して、小さな子供に言い聞かせるように懇切丁寧に説明した。

「昔はみんな着物を着ていたね。でも文明開化で西洋の服が日本に入ってきたんだ。それで欧州風の服は『洋服』、そして着物は『和服』というようになっていったんだよ」

すると、その女子生徒はあっけらかんと答えたという。「何だ、そうなの。誰も教えてくれないから今まで知らなかった！」。

もはや単なる国語力や知識不足という以前の問題だ。教わらなくても常識的に考えれば分かるはずのことまで、「教わったことがないから」と平然としている。「誰もが身に付けているはずの常識的に考えるという能力が、この子からは抜け落ちているとしか言いようがない」と丹羽理事は憂える。

公立高校の世界史の授業で

先生：「まず地図帳を出して。ポルトガルはどこだ。スペインはどこにあるか分かるか」

生徒：「ありました」

先生：「場所が分かったか。じゃあ世界史の教科書を出して、大航海時代の章を開きなさい」

もはや若者に対して「このぐらいは常識だろう」と期待するのはやめた方がいい。例えば神奈川県のごく平均的な県立高校で世界史を教える石橋功教諭は授業を始める前に地図を開かせる。「世界地理で頭に入っているのはアメリカの場所ぐらいと思った方がいい。それぐらい基礎教養は抜け落ちている。大学の先生にしてみれば、それがカルチャーショックなのだろう」と石橋教諭は言う。

こんな具合に大学や予備校、高校などの教育現場で教員が遭遇している「学力低下」の実例は枚挙に暇がない。しかも年を追うごとにそれが進行している事実は、左ページに記した河合塾の試験や東京大学工学部の進学時の試験などのデータが証明してもいる。かつて「教育大国」と言われたこの国に、いったい何が起こっているのか。このままでは日本の未来が危うい。

（写真：柚木 裕司）